

わたし共の研究課題

鶴見岳は「天の香具山」では？

奈良市 水野孝夫

平成16年3月12日朝、わたしはフェリーで別府へ着いた。

「鶴見岳は天の香具山」説を確認するために、鶴見岳へ登って見たかったが、あいにくの雨で山頂は雲に隠れていた。市内鶴見地区の火男火賣神社へ参拝し、『式内・火男火賣神社史』（創建千五百拾年祭記念誌）を社務所で求めた。中を読むと、そのものズバリ「鶴見岳は天の香具山」とわたしには思われた。

神社史執筆者で別府史談会・会長の大野保治氏に質問のお手紙を差し上げたところ、お返事をいただくと共に『別府史談』第17号をご恵送いただいた。そこで貴史談会に入会させていただき、表題について発表させていただくことにした。

◇ ◇ ◇
有名な万葉集第一巻の第二歌は舒明天皇（第三十四代の天皇）の御製とされている。

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は

鴨立ち立つ うまし国そ 蜻蛉島 大和の国は

この歌には江戸時代の万葉学者・契沖（一六四〇～一七〇一）以来、多くの人が疑問を抱いてきた。奈良県明日香にある香具山からは「海が見えないし、鴨もいない」のである。

インターネット上にも疑問の声は少なくない。けれども現代の万葉集の有名解説書は、いずれも「天の香具山」を奈良県にあるものとして疑っていないし、香具山の麓にはこの歌の歌碑も建てられている。

この歌を分析して、この「天の香具山は別府の鶴見岳である」と最初に唱えたのは古田武彦氏であり、その著書『古代史の十字路——万葉批判』等に発表されている。わたしも、古田武彦氏の研究にご協力してきた経過がある。

古田氏の説は、一連の著作を読んでいただきたいのだが、その一部をわたしの理解によってご紹介する。

(1) 「とりよろふ」は、通説では「目立つ、立派な」の意味に解されているが、奈良県明日香の香具（久）山は近在する畷傍山、耳成山（大和三山）にくらべても最も目立たない。

(2) 書紀神話では「大日本豊秋津洲」が生まれたとされるが、大袈裟な修飾語と考えられる「大日本」をはずして考えると、「洲」は「クニ」と訓むべきで、豊国は大分県、そこには

「安岐」という町もあり、その「津Ⅱ港」といえば別府湾である。「あきつしま」は別府近辺を含む。歌で「大和」と詠まれている原文の文字は「山常」「八門跡」の字が当てられて、他に例はなく「大和」と読めるかは疑問である。

(3) 別府湾入口の岬(佐賀関) 南一帯は、古代は「海部郷Ⅱあま郷」に属していた。

(4) 火男火賣神社は「ホノカグツチノ神」を祀る。「あまのカグ山」はごく自然で無縁ではない。

(5) 鶴見岳に登れば、煙(湯煙)も、海も、鷗も、まことに自然なその物ズバリの風景である。

以上、論理は通っていると考えるが、文献上の証拠は見つからなかった。ところが上述の『式内・火男火賣神社史』のなかに、わたしは「天ノ香具山Ⅱ鶴見岳」と十分に推測できる論述を見出したのである。

◇ ◇ ◇
当該神社史には、別府に伝わる古文獻「鶴見山神社由来記」が引用されている。つぎに示そう――

(前略) 古来ノ伝ニ依ツテ、謹ミテ考ヘ奉ルニ遠ツ御代、神伊邪那岐神、妹伊邪那美神、二柱嫁ギ玉ヒテ國の八十島ヲ生ミ給ヒ、八百万ノ神ヲ生ミ給ヒテ、

麻那弟子ニ、火結神ヲ生ミ給フ。

此ノ時、伊邪那美神、御蕃登ヲ燒キテ神去リ給ヒシカバ、伊邪那岐神怒リ、コレヲ斬リ給フ。火結神ノ御体ヨリ成リ、天ノ香具山ヲ初メ、磐群木草海水ノ底ニ至ルマデ火ヲ含マヌモノナシ、ト。
件ノ伝ヲ以ツテ、山ノ靈ハ火結御靈神ト知ラレタリ。

上記は大野保治氏の書き下しによる。このうち「麻那弟子」に「まなでし」のフリガナがあったのに、埼玉県在住の研究仲間・高田かつ子さんが、疑問を持たれたのである。ここを「まなでし」と読んで「愛弟子」の意味に解すると、「愛弟子に、子を生む」とはおかしく、意味不明と考えられたようである。わたしは、この語は「末っ子」の意味と思うと説明した。関西では末っ子のことを「おとんぼ」というからである。高田さんは『古語辞典』を引いて調べてみたところ、祝詞「鎮火祭」に例文があることが記載されていたのである。「麻奈弟子爾 火結神生給氏」(まなおとごに 火結神生み給ひて)

◇ ◇ ◇
大野氏は「戦前の国史教育を受けた人なら誰しも国生みの

神話（記紀神話）を想起するだろう」と解説されているが、記紀神話には「麻那弟子」「火結神」の用語はない。だから前掲「由来記」は、記紀神話よりはむしろ「祝詞・鎮火祭（ちんかさい）」奏状言（そうじょうご）に対応していると考えるべきであろう。

そこで大野氏に質問のお手紙を差し上げ、この点についてご教示を乞うたところ、電話でお答えを頂いた。

① 「鶴見山神社由来記」が、記紀よりは祝詞言（のりとご）に対応していることは、「水野の言うとおりで、当時、三月二十六日挙行の春祭（しゅうさい）までに上梓（じょうし）を急いだため大野氏の調査不足」であつたとのことである。

② 「鶴見山神社由来記」は別府市の文化財報告に記載はされているが、個人の所有物である。大野氏による神社史執筆にあつても、文書拝見はできたがコピーは許されず、（家憲により門外不出という）所有者は文書を所持していることも秘密にされている様子であつたということ。

こういう次第で、「鶴見山神社由来記」の原文を確認できなかった。また大野氏によって「火結神ノ御体ヨリ成り、天ノ香具山ヲ初メ」と読まれている部分は「なに」が「火結神ノ御体ヨリ成り」なのか、その範囲にやや疑問を残すのに対して「火結神ノ御体ヨリ成ル天ノ香具山ヲ初メ」と読むのが

ハッキリしていると考える。火結神こと、カグツチ神のお体そのものから成る「鶴見山」が「カグ山」と呼ばれるのは当然の理と考えたい。

この地（注、別府市）にのみ伝わる文献にある以上、「天ノ香具山」鶴見岳」説はいよいよ確実になつたと思う。大友氏のキリスト教政策や戦国時代の戦火をくぐり抜けて生き延びてきた貴重な文献であるだけに、別府の人々のお力で守つていただきたいと考える次第である。

【参考図書】

- ① 古田武彦『古代史の十字路―万葉批判』東洋書林2001年
- ② 『新・古代学』第四集、巻頭対談・森嶋通夫／古田武彦「新・古代学」編集委員会編、新泉社1999年
- ③ 『古代に真実を求めて』第七集、古田武彦講演録「神と人麿の運命」、古田史学の会編、明石書店2002年

（以上）